

開発種「イタボガキ」の紹介

山賀賢一 主席研究員(増養殖部門)

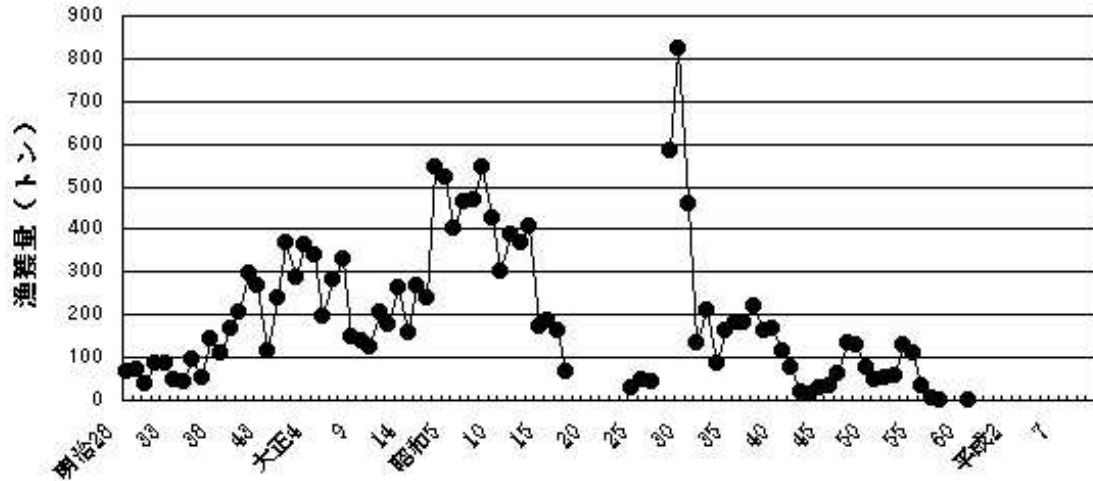
イタボガキについて

イタボガキはマガキ、イワガキ等と同様にイタボガキ科に属する大型のカキで、本州、四国、九州に分布しています。おもに棲息している場所は内湾で水深3~10mの砂礫の海底です。

香川県では「ボタンガキ」と云われ食用として、以前はよく食べられていました。しかし、最近ではほとんど漁獲されることもなく、食卓から姿を消してしまいました。

イタボガキの漁獲量

図に香川県でのイタボガキの漁獲量を示しました。



香川県でのイタボガキ漁獲量

明治28年から平成の始めまでのおおよそ90年間で、多く漁獲されたのは昭和3年から昭和13年にかけての400~500トンで、その後は、太平洋戦争が近づくにつれ漁獲量は減少しています。なお、終戦の昭和20年の前後2~3年間については漁獲統計はとられていなかった様です。昭和24年から再び漁獲統計がとられるようになり、漁獲量は昭和24年の30トンから徐々に増加し、昭和29年に過去最高の822トンが漁獲されました。昭和30年代は200トン前後で推移しましたが、その後増減を繰り返しながら、次第に減少し昭和60年の2トンを最後に漁獲統計からも姿を消してしまいました。



イタボガキの剥身作業(丸亀市御供所、大正15年)

戦前におけるイタボガキの養殖試験の取り組み

大正5年から昭和12年までの21年間、香川県水産試験場ではイタボガキの養殖、天然採苗等の試験を実施していました。その理由として、大正5年ごろの世界は大混乱をしていた時期(第一次世界大戦後)で、欧米市場では水産食品が需給の平調を失い価格が暴落しており、この時局を利用して欧米人の最も嗜好するカキを貿易品として出荷すれば本県水産業の発展が図られると考えていたようです。

同年に小田村(現、さぬき市志度町)産イタボガキを農商務省水産講習所に依頼し、缶詰にして英国に輸出試売したところ、結果は良好で折り返し5000箱(1箱は5オンス缶が4ダース入りで7円であった)の大注文が入った。早速、水産講習所は香川県に相談したところ、漁期が過ぎてカキはなく、1箱も送ることができなかったと云うことがあったようです。

香川県水産試験場では長年イタボガキの養殖等の試験に取り組んできたのですが、結果的に養殖にかかる生産経費が天然産イタボガキの漁獲コストを上回るなど採算に合わないということで養殖には至らなかったようです。

平成14年のイタボガキの種苗生産試験

親 貝： 近年イタボガキは1年に1個か2年に1個程度、丸亀市漁協から小型底引き網で漁獲されたものを提供していただいていたのですが、数がまとまらず、飼育中にへい死して種苗生産するまでに至っていませんでした。

平成14年6月10日に、白方漁協青年部(仲多度郡多度津町、井上部長)より、小型底引き網で漁獲された親貝5個体(平均殻長、86.8mm)を入手し、種苗生産試験を行いました。マガキ、イワガキ等の種苗生産は雌の個体が卵を雄の個体が精子を海水中に放出し受精が行われ成長(トロコフォア幼生、ベリジャー幼生、D型幼生等に変態する)していきますが、イタボガキは親貝の体内で受精が行われ、D型幼生で産仔される特徴を持っています。

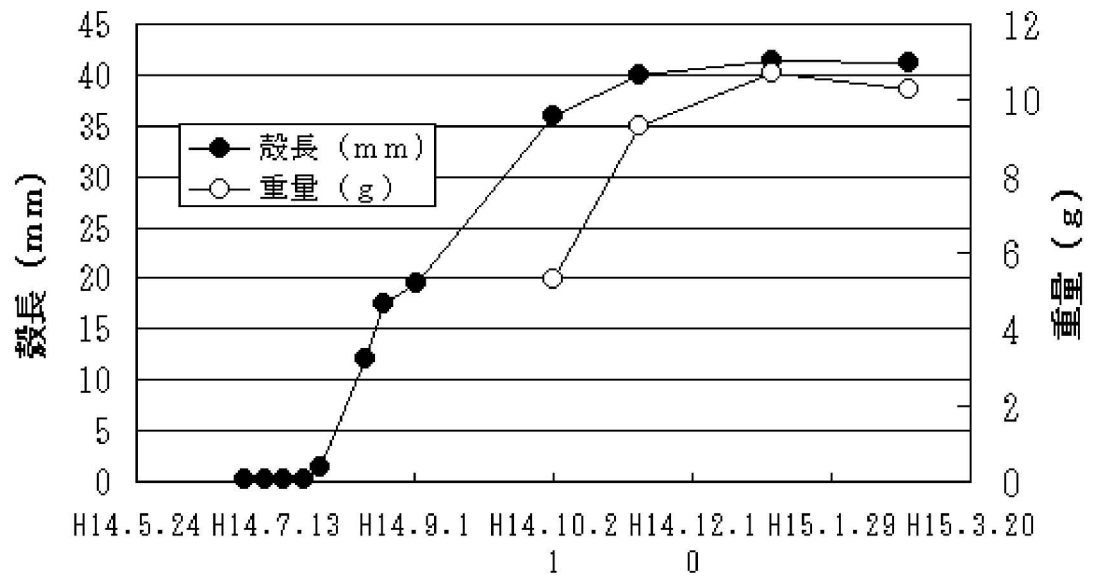
産仔の方法： ①親貝の輸送による空中露出による刺激
②自然産仔を待つ—100 l 水槽で止水、給餌の室内飼育。餌料はナンノクロロプシスとパブロバルーテリーを給餌。

採 卵： ①輸送直後の10日と翌11日の50万個体、合計100個体産仔。
②6月25日に180万個体自然産仔、28日にも180万個体産仔。

室内飼育： 餌料は室内で培養した、ナンノクロロプシスとパブロバルーテリーを成長に応じて給餌。
①原生動物が大量に発生し全滅。
②順調に経過し産仔後、16日目に採苗器を投入、26日目に付着稚貝を確認。

海上垂下飼育： 7月26, 30日に付着稚貝をタマネギ袋に入れて垂下飼育を開始。

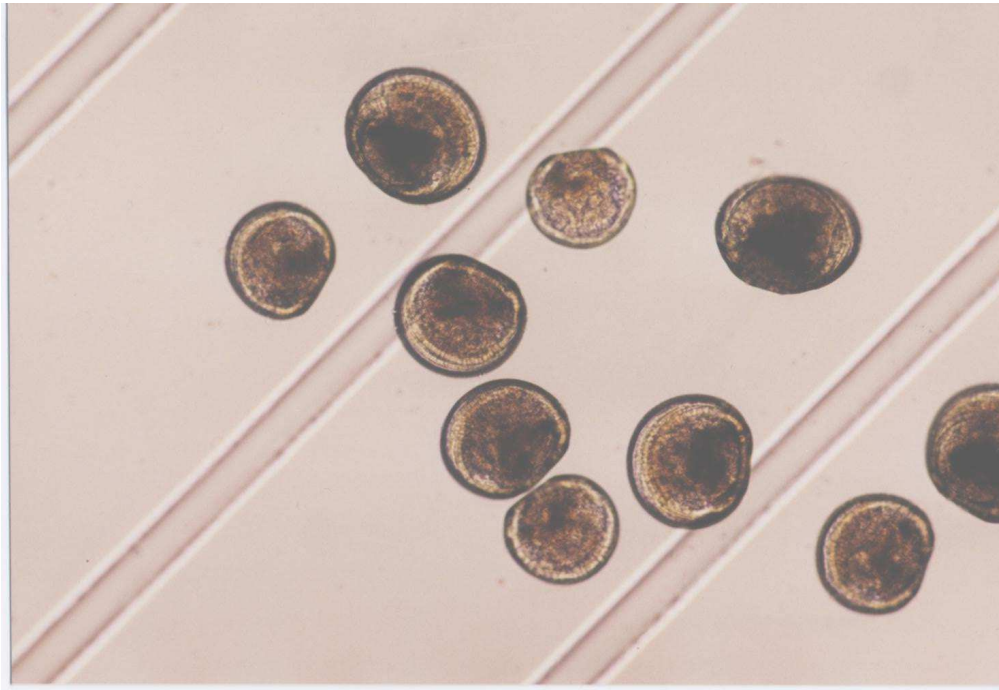
成 長： 図に成長を示しました。12月に入って成長が止まっているのが気がかりです。



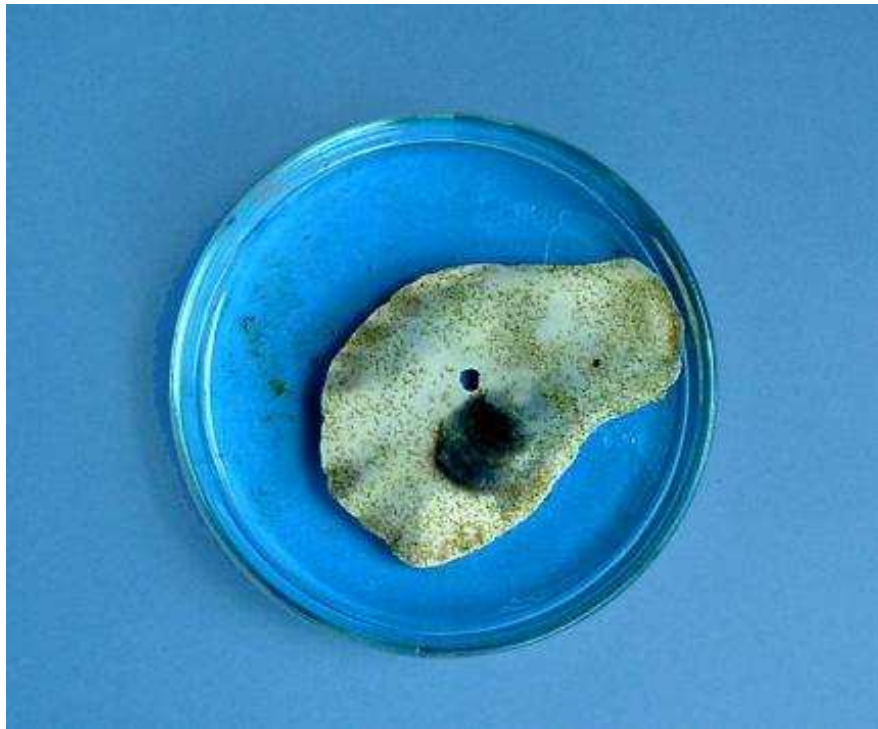
イタボガキの殻長と重量の推移



イタボガキの親貝



産仔後14日目のD型幼生



1ヶ月目の付着稚貝(カキ殻に付着、黒い点に見える)



付着稚貝(カキ殻に付着している稚貝を拡大)



約8ヶ月後のイタボガキ(平均殻長約4cm)